

日本癌治療学会ガイドライン統括・連絡委員会の活動と
「希少癌診療ガイドラインの作成を通じた医療提供体制の質向上」との連携

研究分担者 藤原 俊義 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 消化器外科学 教授

研究要旨

日本癌治療学会は、診療科横断的ながん医療専門の統合的学会であり、2004年以降「がん診療ガイドライン」として各臓器・領域のがん診療ガイドラインの評価とウェブ公開を推進してきた。現在、jsco-cpg.jpにて23領域の臓器がん別ガイドラインと6つの支持療法に関するガイドラインを公開している。アクセス件数は、2016年は月平均119,895件であり、2007年の公開開始以降毎年増加してきている。また、第54回と第55回の日本癌治療学会学術集会においては、がん診療ガイドラインに関する企画シンポジウムを開催し、その中で軟部腫瘍、皮膚悪性腫瘍、GIST、頭頸部癌、脳腫瘍などの希少癌に関する報告を行い、また、本研究の内容や進捗状況も報告して連携を図っている。

A. 研究目的

希少癌は、10万人当たり年間6例未満の稀な癌であり、数少ない症例が各診療施設に分散するため、診断・治療の施設間格差が生じやすく、適切な診療を受ける機会が乏しいという社会的な問題がある。

本研究において、癌治療学会は横断的な学会として各専門領域の最新の学術的知見を幅広く共有し、科学的根拠に基づいた正確な情報を医療関係者および国民に広く発信することで、希少癌に対しても、質の高いがん医療の水準を保つことを目的とする。

B. 研究方法

癌治療学会がん診療ガイドライン委員会では、幹事委員会、協力委員及び評価委員からなる29の分科会、G-CSFおよび制吐薬適正使用ガイドライン改訂ワーキンググループ、小児思春期・若年がん患者の妊孕性温存に関するガイドライン作成ワーキンググループ、がん診療ガイドライン評価委員会が連携し、エビデンスに基づいた正確な情報を迅速にホームページ上に提供するとともに、その現状、アウトカム評価などに関して、日本癌治療学会学術集会において企画シンポジウムを開催してきた。

C. 研究結果

日本癌治療学会「がん診療ガイドライン統括・連絡委員会」では、がんの診療ガイドラインの作成・公開・評価のあり方について検討し、「がん診療ガイドライン作成・改訂委員会」、29領域の分科会、及び本学会が主体となる「制吐薬適正使用ガイドライン改訂ワーキンググループ」、「G-CSF適正使用ガイドライン改訂ワーキンググループ」、「小児思春期、若年がん患者の妊孕性温存に関するガイドライン作成ワーキンググループ」などと協力し、jsco-cpg.jpにて23領域の臓器がん別ガイドラインと6つの支持療法に関するガイドラインを公開している。アクセス件数は2016年は月平均119,895件であり、2007年の公開開始以降毎年増加してきている。

平成27年の第53回日本癌治療学会学術集会から、がん診療ガイドラインのアウトカム評価のための企画シンポジウムを実施しており、臓器別ガイドラインの作成者の先生方に現状と問題点を発表頂いており、第54回、第55回の日本癌治療学会学術集会では、軟部腫瘍、皮膚悪性腫瘍、GIST、頭頸部癌、脳腫瘍などの希少癌のガイドラインについても報

告を頂いた。

軟部腫瘍領域では、日本整形外科学会監修のもと2012年に発刊された「軟部腫瘍ガイドライン」をもとに診療が行われているが、実臨床における本ガイドラインの利活用およびその評価に関して、アンケートによる実態調査を行い、本ガイドラインの普及や今後の改定に反映させる旨の報告を頂いた。

皮膚悪性腫瘍領域では、日本皮膚科学会/日本皮膚悪性腫瘍学会において作成された「皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン第2版」が用いられているが、アンケートによる実態調査から、実際の診療に役立っているとは考えられるものの、予後の改善や患者の治療満足度・QOLといったアウトカムの検証はできておらず今後の課題であるとの報告があった。

GIST領域では、2008年に「GIST診療ガイドライン」の第1版が発刊され、その後、最新のエビデンスを基に2回の改定がなされ、現在は第3版（2014年）が使用されているが、その利用状況や効果、ガイドラインの普及による診療同行への影響などについて、アンケート調査の結果から現状報告を頂いた。

頭頸部癌領域では、日本頭頸部癌学会より2018年に「頭頸部癌診療ガイドライン（第3版）」が最新版として発刊されたが、関連学会の協力のもとオールジャパン体制での全国症例登録システムが構築されており、そのビッグデータから得られた最新のエビデンスを基に、根治とQOLの両立を考慮し、最適な治療法の確立を目指している旨の報告を頂いた。

脳腫瘍領域では、140種類以上に細分される原発性脳腫瘍の中でも、比較的発生頻度の高い3大髄内腫瘍（成人膠芽腫、成人転移性脳腫瘍、中枢神経系原発悪性リンパ腫）に関して、日本脳腫瘍学会を中心に2016年に「脳腫瘍診療ガイドライン」が発刊され、その後引き続いて、低悪性度神経膠腫、小児脳腫瘍である髄芽腫、上衣腫、上衣下巨細胞性星細胞腫などの診療ガイドラインの作成に取り掛かって

いる旨の報告がなされた。

企画シンポジウムの中では本研究の紹介も行き、各ガイドライン委員会との連携を深めた。

D. 考察

がん対策基本法に基づくがん医療の標準化の流れの中、診療ガイドラインの普及はわが国におけるがん医療の質の向上と均霑化に大きな役割を果たしている。特に、症例経験の不足から不適切な診断・治療となりがちな希少癌に対しては、診療ガイドラインの意義は非常に大きいものと考えられる。

今後、更なる診療ガイドラインの普及が望まれるが、希少癌に対しては特に、各関連学会との協力のもと、オールジャパンでの症例登録システムを構築し、ビッグデータから導き出された質の高いエビデンスに基づくガイドラインの作成・改定を適宜行っていくことが重要である。

E. 結論

希少癌に対する診療の質の向上と標準化において、診療ガイドラインの意義は非常に大きいものと考えられる。

G. 研究発表

- ・藤原俊義、小寺泰弘、平田公一、北川雄光：日本癌治療学会「がん診療ガイドライン（jsco-cpg.jp）」アクセス状況. 第55回日本癌治療学会学術集会、横浜、2017年10月.
- ・小寺泰弘、安藤雄一、室圭、川井章、小田義直、藤原俊義：希少癌診療ガイドラインの作成を通じた医療提供体制の質向上. 第55回日本癌治療学会学術集会、横浜、2017年10月.

H. 知的財産権の出願・登録状況

該当なし